



TITLE:

本邦高地[聚]落の研究(第一報)(一): 現地調査を主にして

AUTHOR(S):

小牧, 實繁

CITATION:

小牧, 實繁. 本邦高地[聚]落の研究(第一報)(一): 現地調査を主にして. 地球 1936, 26(4): 246-260

ISSUE DATE:

1936-10-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184613>

RIGHT:

Globigerina 類が多産する事實は本貝層堆積地の外海性或は其の外海との相當自由な連絡を物語つて居る。尙此處の有孔蟲群が波浪に洗はれもまれて集積されたものである事も明瞭に看取される。兎に角全般的性質は貝化石群のそれと大差ない。他の化石層との比較には猶充分なデータがないから控えて置きたい。(鈴木)

終に貴重なるスケッチを貸與された横山教授、貝化石同定に當り御教示下さつた黒田氏に感謝する。

本邦高地聚落の研究(第一報) (一)

——現地調査を主にして——

小 牧 實 繁

筆者は昭和七年、地理論叢第一輯に「日本に於ける聚落の高距限度」を發表し、陸地測量部五萬分一地形圖上に於ける調査から知り得たこと、及び考へ得たことを記載し説述するところがあつたが、その後信州の三澤勝衛氏、東京の井上修次氏、臺灣の内田勸氏などから厚意に充ちた有益な御示教を得たので、これを昭和八年、地理論叢第二輯、昭和九年、同第五輯に「日本に於ける聚落の高

距限度補遺」として記録して置いた。その後實地調査を期しながらその意を果さなかつたが、今夏漸く望みの一端を遂げることができたので茲にその結果を摘録し、尙ほ大方の御示教を仰ぐこととする。

踏査のコースは七月十六日、土に入つて八月二十七日小諸に出るまで全く氣紛れなものをとつたが、本稿に於いてはそれは凡て省略し、且記述もコース順にはよらず、便宜前掲の拙稿に挙げた報告事項の圖幅順によることとする。

前掲拙稿に於いては登山用の小屋をも、讀圖によつて知り得た儘に、その若干を記載したが、本稿に於いてはそれには言及しないこととした。吾々は今日では日本山岳會發行の立派な「山日記」を手にすることができ、それには山小屋の正確な位置、時としては正確な高度、そして番人の有無、常住、非常住、番人滞在期間の如何等が記載されてゐるのであるから。

以下が筆者の調査を主にした簡單な記述であるが、茲に現地の調査に際して種々の御教示に預かつた地方諸人士に厚く感謝の意を表して置き度い。

輕井澤圖幅

前掲拙稿には淺間牧場を挙げたが、この牧場は後述の多くの牧場に比べると餘り大規模のものは言へないやうである。群馬畜産組合の經營で、大體牛馬三〇頭くらゐを預かるに過ぎないのとである。(此の項、後述の湯ノ丸牧場にての聞き書による)

上田圖幅

前掲拙稿には鹿澤(山湯)一五二〇—一五四〇米を舉げて置いたが、これは昭和四年修正測圖に於いては舊鹿澤と改められ且建物の記號にも修正が加へられてゐる。この溫泉は、現今は群馬縣マサギ吾妻郡のうちであるが、舊藩時代には信州禰津(三萬石)の代官領に屬し禰津の山の湯と稱せられてゐた。老人は今も尙ほさう呼ぶ。溫泉旅館は元來五軒あつたが今から十九年前火災に罹つて以來全くは復興せず、(古い石垣などが残存してゐる)、下流に新鹿澤が經營せられることとなつた。現在旅館は紅葉館一軒のみであるが、年中經營し、夏は避暑客で賑はひ、冬はスキー家が殺到する。併し新鹿澤の俗氣なく、今尙ほ山の湯の名にふさはしいものを有つてゐる。讀圖でも道路を挿んで二つの建物があることが知れるが、全くその通りで、それを一軒の紅葉館で經營してゐるのである。圖上では一五三五米の標高の西方に建物の記號が讀取れるが、これは紅葉館の自家用發電所である。

全圖幅の湯ノ丸牧場は今日では前記紅葉館の經營に移つてゐる。一五八〇米の近くに事務所兼番小屋があり、紅葉館の客を泊めもする。冬は牧場の仕事はないがスキー家が訪れるので開いてゐる。

牧場は明治三十六年禰津村の豪家新井氏の開設にかかる。同氏破産のため人手に移り其の間二度ばかり休場したのが大正十五年再生、昭和七年紅葉館の手に移り本年(昭和十一年)より紅葉館の直營となつた。周知の如く信州や上州は養蠶の本場で殊に夏は農耕と養蠶のため農家は多忙を極め牛馬のことなど構つてゐることができない。これが信州、上州に多數存在する牧場發生の重要な契機の一である。湯ノ丸牧場では五月初め開場から十月末閉場まで、日により頭數に異同はあるが大體牛一五〇頭、馬九〇頭ばかりを預かる。昭和十一年八月二十二日の現在は合計二三六頭であつた。日

により頭數に異同があるのは言ふまでもなく預け主の請求により返却することがあるからである。牛は乳牛のみであり、牛馬とも十月二十日には大體下つてしまふ。預かり賃は馬一頭一日六錢、牛同五錢、五〇日以上は五厘引、一〇〇日以上は更に五厘引、一〇頭以上團體放牧の際は更に相談するとのことである。大體牛は一六〇日、馬は八〇日くらゐ滞在する。馬の滞在が短いのは、當地方の牧馬は子馬とりが目的で、その子馬が市の關係から早く下るためである。牛の放牧賃の安いのは滞在期間が長いからとのことである。牧草は充分あるが（然らずとも言ふ）草のほかは鹽を與へなければならぬ。その鹽は牧場もちである。家畜には爪に焼印を捺して所有を區別し、脱出を防ぐためには柵を施してゐる。この牧場は起原が古いためか、それらの人工物も既に立派に周圍のグレンデと調和して快い風景を點出してゐる。現在の地籍は群馬縣に屬するのに群馬縣側から上る家畜は殆んどなく、信州側の南北佐久、小縣方面から上るものが殆んど全部を占めてゐるのは古くからの傳統を物語るものであらう。勿論、群馬縣側には田代牧場、淺間牧場などの牧場があるためといふ事情も考慮の中に入れられなければならぬ。併し、傳統の力がはたらいてゐることも事實である。筆者が同牧場を訪れた際、北佐久郡小沼村乗瀬から上つて來てゐた預け主の語るには、小沼から湯ノ丸までは七里あり、淺間牧場へ上つた方が近いのであるが、兎に角自分達は遠くとも慣れた方につて來るのである、乗瀬の區に牛だけで役用の朝鮮牛（長野縣に入りてより十四五年）と搾乳用の日本牛とを合はせて八〇頭ばかり居るが、半分は輕井澤牧場、半分は湯ノ丸牧場に上るのである、北佐久はさうか南佐久からでも湯ノ丸に上るものがあるとのことであつた。尙、この人は所有の家畜

を連れ戻しに上つて來てゐたのであつたが、家畜も下るのは厭だらうと語つた。それは第一僚友と別れなければならぬため、それと暑い平地では虻や蚊に苦しめられなければならぬためだと言ふ。その間の事情が又確かに本邦に於ける高地牧場發生の一要因であると思はれる。

田代牧場の建物の記號のある地點は高度一三〇〇米に達しないために實地調査をしなかつたが、信州の滋野村から地藏峠を越して同牧場に預けた家畜を連れに行く三人の人に峠の上で聞いたところによると、同牧場は群馬畜産組合の經營で、牛馬半々くらゐを預かつてゐる。例年ならば四〇〇頭くらゐ居るのだが今年は湯ノ丸牧場の方に多くは入つたので大體湯ノ丸と同數くらゐであらう、預かり賃は牛馬共に一日六錢、一〇〇日以上の場合には割引がある、田代のよい點は地形が穩かで牧草が多く、脱柵の危險が少い點にあるとのことであつた。田代へは嬭戀村のものは勿論信州側の牛馬も入るのである。

同圖幅の五十番茶屋は今跡方もなく消滅してゐる。舊鹿澤の衰微と共に亡びたものらしい。舊鹿澤即ち禰津の山の湯の盛なりし頃は禰津から山の湯まで登路の一町毎に石の佛像を安置し往來の安全を祈つたものであるが、五十町目の五十番觀音とシナノキの大木との傍にあつたのが五十番茶屋であつたのである。今はそのシナノキの大木の綠蔭と五十番の觀音像とが鹿澤盛んなりし頃のこの交通路の狀況を偲ばせるだけで茶屋は跡方もなく草叢の茂みに隠されてゐる。四十番茶屋（一三〇〇米以下）すらが僅かに餘喘を保つに過ぎずじめな姿を呈してゐるのである。地藏峠を越しての鹿澤への登路は今では全く省營自動車の通路鹿澤口からの登路にけ壓されて裏道の觀を呈し、全

然地方的の意味しか有たないのである。

草津 圖 幅

萬座温泉は實地調査することができなかつたが、草津から澁峠を越し熊ノ湯から發咄温泉に行く途中で道伴れとなつた東京の某ハイカーその他の實地宿泊者の言によると萬座温泉には旅館が三軒あり、冬もやるとのことである。

本圖幅中に於ける高度一三〇〇米以上の聚落として前掲拙稿に擧げたものは一七四〇米の前記萬座温泉のみであつたが若干の補遺が必要である。

第一には草津温泉から澁峠に至る間に香草温泉及び草津礦業所香草合宿所ができてゐる。不幸にして今夏の實地調査に於いてはその立地の正確な高度を明かにすることができなかつたが、一三〇〇米以上であることは確かと思ふ。香草温泉には昭和四年の開設で山樂園といふ旅館が一軒ある。山日記によれば高度一四〇〇米、番人常住とのことである。その直ぐ近くに草津礦業所香草合宿所その他の礦業所關係の住宅が數軒ある。同礦業所は硫黄の採取を目的としてゐるがこれ等の合宿所及び住宅は冬も住はれ常住である。礦業所は昭和十年四月開設の由。

澁峠より熊ノ湯に至る路傍には所々馬頭觀世音の石碑が建つてゐてこの交通路の舊況を物語るやうであるが、今の交通量は微々たるものであり澁峠には茶店の如きものも無い。唯、スキ一の普及と共に峠には横手山のヒュッテが出来、其處に母親と死別したといふ本年十歳の少年と其の父親とが住んでゐて夏は冬の薪作りをやつてゐる。スキー客相手のものであるが兎に角かやうにしてこの

小屋は常住である。

須坂圖幅

前掲拙稿に上信硫黄會社として挙げたものは、昭和六年修正測圖に於いては米子硫黄礦山と改正せられてをり、且建造物の記號も數及び大いさに於いて修正せられてゐる。それから前掲拙稿に挙げなかつたもので小串硫黄礦山といふのが同修正測圖に於いては毛無峠の東南方、高度一七〇〇—一七四〇米の地點に新たに記載せられ、建物の記號が入つばかり記入せられてゐる。また修正測圖に於いては根子岳頂上(二一九五米)に神社と建物の記號が記入せられてゐる。但し、これ等は今夏の調査に於いては實地踏査することができなかつた。

同圖幅の北信牧場には大きな變化が認められる。修正測圖でも見られる如くに、高度一三〇〇—一三二〇米の地點に牧場事務所のほかに長野電鐵自動車須坂—菅平線終點の賣店兼飲食店が出來てをり、同一四〇〇米附近の地點には長野縣青年講習所(訓練所)や文部省菅平高原體育研究所やができてゐる。後の二者は聚落と稱するには餘りに特殊なものであるが、兎に角其處には夏冬を通じて人が生活してゐることだけは事實である。これ等は何れも牧場の土地を借り受け或ひはその寄附を受けて立地してゐるのである。北信牧場では他の多くの牧場と同様賃銀を取つて農家の牛馬を預かつてゐる。大體牛三〇〇頭、馬三〇〇頭がそこに放牧せられてゐる。牛馬共に五月半ばに上り九月一杯居る。北信畜産組合の經營である。

東組・西組・中組・向組などの菅平の聚落の本體は高度一三〇〇米以下(東組の神社は一三〇〇

米以上）であるが、その耕地は僅かながら一三〇〇米を越し、そこに蕎麥などが作られてゐる。土地が高いので白菜や馬鈴薯などの寒地作物の栽培に適してゐることは三澤勝衛氏等の説かれた如くであるが、併し此處の耕地殊に宅地附近の耕地には玉蜀黍や豆や葱や人蔘などの種々の作物も作られてをり、又、桑が栽培せられて養蠶が行はれてゐる。冬はスキー關係の收入があること縷言の要もなからう。菅平の聚落は高度一三〇〇米以下に立地するので本稿の問題外であるが參考のため附記して置く。

中 野 圖 幅

熊ノ湯には佐藤菊治氏の經營する旅館「熊の湯」が一軒あり、冬もやるどころでなく冬はスキー客で雜沓する。

同圖幅の杓打茶屋は元來は上州草津—信州中野なる交通路に沿つて發達したもので、この交通路の交通は一時衰微したために若しそのままで行けば此の茶屋も前述の五十番茶屋と運命を同じくするのであつたらう。然るに熊ノ湯・發哺の溫泉場を背後に有ち、スキー場として絶好の條件を具へた志賀高原の開發を見た杓打茶屋の運命は五十番茶屋のそれとは若干趣きを異にした。そしてスキーの流行に應じて此の茶屋は冬も開いてゐる。但し最近丸池ヒュッテに至る新道が開鑿せられて上林から丸池まで自動車で直行できるやうになつたから杓打茶屋の前途には多少の暗影がさしてゐるやうにも思へる。

尚、前掲拙稿に擧げなかつたもので補ふべきものに琵琶池水槽番人小屋がある。昭和六年修正測

圖には琵琶池畔の高度一四〇〇米の地點にそれが補入せられてゐる。琵琶池は大沼池・丸池と共に元來自然のものであるが、長野電燈がこれに若干の人工を加へて貯水池として利用してゐるのであり大沼池・丸池には無いが、琵琶池には水槽番小屋が設けられてゐるのである。小屋は常住である。昭和六年の修正測圖にも未だ記入せられてゐないものに河原の小屋がある。發哺溫泉への登り口橋を渡つた所の高度一三二〇米の邊に立地する。夏は勿論、冬も開いてをる。主人の名を冠して金太小屋とも言つてをり、昭和九年十一月の開設である。これは山日記に記載せられてゐないから此處に取り上げて置く。

岩 菅 山 圖 幅

前掲拙稿には硯川を舉げたが昭和六年要部訂正測圖には硯川は見當らない。恐らく大正元年測圖の時には存在したものが昭和六年以前に消滅したのであらう。そしてそれは又この聚落を發生せしめた普通の意味での交通路の不振を物語るものであらう。

發哺は要部修正測圖に於いては發哺溫泉と訂正されてゐる。圖上には四つの建物の記號（これも修正せられてゐる）が讀取れるがそしてそれは正しいのであるが、これを經營してゐるのは天狗之湯・藥師之湯の二軒の旅館である。天狗之湯には天狗を祀つた神祠がありこの湯は百六、七十年前よりの經營であると言ひ傳へられてゐる。當主は關金治郎氏、常住で、冬はスキー客が殺到する。

前掲拙稿には熟平小屋マシラを舉げ單に小屋と記して置いたが、これは普通の登山小屋ではなく、清水小屋（一三〇〇米以下）などと共に山稼ぎの小屋である。而もその山稼ぎと言ふのは炭焼などではな

く、この地方は有名な竹の産地でその竹を切り出す仕事であると言ふ。
これに對して岩菅山頂附近の岩菅小屋は登山小屋であるが、番人は不住である。また岩菅山頂には神社があるが（大正元年測圖にも記載されてゐる）これも勿論不住である。

諏訪圖幅

前掲拙稿には東餅屋を擧げたのみであつたがその他に補ふべきものが多くある。即ち霧ヶ峰一帯に於けるものである。これ等に就いては山日記を參照のこと。尙、石村新吉氏の「南信の民謡と温泉郷を訪ねて」山小屋、昭和十一年九月號、一〇四—一二頁に）によれば、霧ヶ峰蓼の海に今夏八月新たに碧水莊なる旅館が建設せられ同日から開業したとのことであるが、避暑客・ハイカー・スケーター・スキーヤー相手のものであるから常住のものとなるのでないかと思はれる。

蓼科山圖幅

前掲拙稿には小齊湯・瀧ノ湯は高度一三〇〇米以下であるので擧げず、一三六〇米附近の新湯のみを擧げて置いたが近年蓼科高原温泉郷の發展は物凄じかりで、俗化の傾向すら萌してゐるものの如く、一三〇〇米以上の緩斜面に建てられた別荘の數も簡單には數へ切れぬ程である。新湯は新湯が正しいのであらうが現地では親湯と書いてゐる。

これに比べると明治湯（明治温泉）は旅館も御射鹿ホテル一軒だけで未だ充分山の湯の香をただよはせてゐる。スキー・スケートの客が來るので冬も開いてゐる筈である。

澁ノ湯（澁温泉）も旅館は唯一軒で、規模は明治温泉より遙かに大きい但未だ俗化してをらず、

氣持のよい山の温泉である。

本澤温泉は白馬温泉の高度二一〇〇米には一籌を輸するがそれでも二〇六〇—二〇八〇米の高度に立地し温泉の高座を占めてゐる。旅館も此の高位位置のものとしては堂々たるものであるが但し營業は十一月一杯で、冬は番人だけを残して諏訪に下る。併し番人が居るとすれば常住と言へぬこともない。

筆者は前掲拙稿に唐澤湯、一九〇〇—一九二〇米を挙げながら今夏の實地調査に於いては訪れることが出来なかつたが、石村新吉氏の「南信の民謡と温泉郷を訪ねて」(山小屋、昭和十一年九月號、一〇四—一二頁)によると、唐澤の谿谷に臨む森林帯に今夏落成したばかりの旅館が一軒あるらしい。

前掲拙稿には稻子湯を舉げて稻子小屋を挙げなかつたが、昭和四年要部修正測圖には稻子小屋といふのが、一四五〇米の地點に記入せられてゐる。稻子小屋は稻子牧場の番小屋で掬すべき清水を有つてゐる。元來牧場の事務所兼番小屋といつたものであるが飲食店も兼ねた形で場合によつては登山者を宿泊させもする。稻子牧場は地所は村のものであるのを年いくらといふ地代を拂つて經營者が借り、一夏いくらといふ賃銀を取つて農家の牛馬を預かつてゐるのである。大體牛一〇〇頭、馬四〇頭くらゐを預かつてゐる。馬は雌雄何れも預るが但し雄馬はキンヌキ(去勢馬)に限る。牛は牝牛のみで牝牛は交尾のために上らせるだけである。牝牛は肥やすために上らせるのである。牝牛は産れると牛乳商に賣るのがこの地方の行き方である。家畜は大體五月八日頃に上り十月の終りま

で滞在する。牧草は勿論充分にあり、水も山にあるのを家畜は勝手に飲む由。この牧場は牛も殊に牡牛の放牧が卓越してゐる特徴を有してゐる如く思はれる。

前掲拙稿には蓼科牧場を挙げたが昭和四年要部修正測圖ではそれが無くなつてゐる。

八ヶ嶽圖幅

國界には元來家が五軒あつたが、今は唯、一軒残つてゐるばかりである。他は凡て廢屋になつてゐるところか、大門橋の家は十年も前に無くなつてゐる。元來國界の聚落は佐久甲州街道に發達したもので、以前は佐久―甲府、佐久―諏訪の交通も相當なもので、聚落の五軒のうち四軒は宿屋兼飲食店、一軒は商店兼馬力運送業であつた。交通量の減少と共に此の聚落が衰へ始め、大門橋の家が最初に無くなりその他の家も順次に無くなり最後のものは一昨年無くなり、残る一軒も元來は宿屋であつたが今は廢業して山仕事殊に材木出しを業としてゐるに過ぎない。因みに此の家では自家用に馬鈴薯・人蔘・牛蒡・大根等を作つてゐるが、よく出來るといふ。

國界の北方、信州側の佐久甲州街道から、二ツ山に至る聯路の分岐する地點、高度一三七五米の所に、建物が三つある如く五萬分一地形圖(昭和四年要部修正測圖)には記されてをり、(明治四十三年測圖にはなし)その一軒は東電の詰所で常住であるが、他の二軒は空家となつてゐる。(但しその一軒には昭和十一年の夏現在では或る土方が假住して居た)これ等の三軒は元來は前記の國界と同様の機能を有したものが全く同様の運命を辿つたものであらう。そしてその跡に新築されたのが前記東電の詰所なのである。因みに此の地點の名稱は曾根崎であるらしい。

これの東方に三軒家があり、昭和四年要部修正測圖には尙ほ一個の建物の記號を存してゐるが、三軒家は今では全部無くなつてゐる。墓地のみを残して二ツ山と板橋とに移轉したのであると言ふ。

三軒家の南方、地圖上の聯路と小徑との交點附近、高度一三六〇米の邊に、東信二ツ山牧場の事務所がある。前掲拙稿に矢出原牧場として挙げたものは今は無くなつてゐるが、それが二ツ山牧場になつたのであらう。現在はその二ツ山牧場とその後にできた東信牧場とが合併せられて（昭和九年合併）東信二ツ山牧場と稱せられてゐる。名稱は東信であるが、經營者は甲府の某資本家で、自己所有の乳牛一〇〇頭ばかりを放牧する傍ら（冬は甲府にて舍飼する）農家の牛馬をも預かつてゐる。

五月一日開場、十月二十日閉場、二歳以上にて去勢せざるものは入場を許さず、預かり賃は二歳以上の牛馬共に一頭一日六錢、犢付一日八錢、犢一日四錢、一〇頭以上合同放牧の場合は一頭一日五錢といふ規定（昭和十一年五月）になつてゐるが、預かり家畜としては馬の方が牛よりも多く、預かり馬一〇〇頭に達してゐる。家畜は甲州からも信州からも上る。經營者は乳牛を主眼としてゐるが三歳ぐらゐならば肉用牝牛をも飼ふ。當牧場の規定では五月一日開場、十月二十日閉場となつてゐるが、預け主の百姓の話では四月末に上げ十一月の初めに下げるとのことであつた。尙、此の預け主の百姓の言によつても、信州に於ける牛馬の放牧は養蠶期間中のもので、それが濟めば下すのである。又此の地方の牧畜は主として牧馬でそれも子馬取りを主眼にしてをり、南佐久では八月下旬に子馬の品評會がありそれに引續いて市があるのに出するのである。東信二ツ山牧場の如きは寧ろ例外で、現在では縣の補助を得て大抵の村が村有の牧場を經營してゐる。村有牧場では預かり賃は

一日一頭二錢くらゐでそれが番人の日當その他に當てられるのである。冬は各農家の厩で舍飼ひし乾草をふませてウ、マ、ヤ、ゴ、エをとるのである。乾草は警察の許可、立會の許に焼いて置いた區有の草場で秋蠶が濟んだ後の一、二週間のうちに刈り度いだけを刈つて作るものであるとのことである。當地の子馬市は海ノ口の市場で立つが今年は八月二十五日から三日間品評會が開かれ二十七日授賞式が行はれ二十八日から九月一日まで市が立つて七〇頭ばかりの馬が集つた。この市は年一回、南佐久郡限りのものであるが買ひ手は全國から集り今年は四國や佐渡からも來た。市の通知は郡畜産組合から發送して置くのである。子馬が買はれて行くので親馬は出さない。南佐久では九月二十六日二十七日にも小海で馬市が開かれるが、これは品評會を伴はない。因みに牛市も白田で年一回十月中旬品評會の後に開かれる由。

二ツ山は三軒家から移つたものの聚落である。元來三軒家は佐久甲州街道(舊道)の交通に關係し藩から扶持米を得て漸くその生活を維持して來たのであつたが藩からの扶持米が得られなくなつてからの此處の生活は容易なものではなくなつた。そこで一軒は板橋へ、二軒は二ツ山へ移轉したのである。二ツ山の二軒は百姓としての生活に勵み一軒の新屋を生じて三軒となつた。二ツ山には畑は勿論、田も若干はある。米は食ふ丈けは穫れる上に、蕎麥・白菜・馬鈴薯などを多く作りその上に馬の子を二、三頭は賣る。僻陬で金を費ふことがない上に儲けが多いから二ツ山は金持ちだとの評判をとつてゐるくらゐである。前掲拙稿には山村かと記して置いたが山村の色彩は殆んど認められないと言へる。

板橋は三澤氏の御示教の如く初めは交通的に發祥したものらしいが、今は立派な農村で、戸數は四〇戸ばかりに達してゐる。米は不足であるが畑作は盛んで、蕎麥・麥・馬鈴薯・キャベツ・大根・人蔘・牛蒡などが作られ、畑作は凡てよくできる。その上馬を飼ひ、多きは一軒で五頭も飼ふものがあり、何れも子馬とりを主眼とする。近年山羊を飼ふ者も多い。冬は山仕事をやり、炭も少しは焼く。併し、この村は大體畑作と産馬とを主とすると言へるであらう。尙、修正測圖では建物の記號が二三増加してゐるのも注意せらるべきであらう。

前掲拙稿に擧げなかつたもので、昭和四年の要部修正測圖にも載せられてゐないもので補ふべきものは最近に出現した小海線野邊山驛々員の官舎四棟と驛前の一軒家及び附近に於ける二軒の別莊である。別莊は益々増加の傾向にあつても常住ではないが官舎は勿論常住である。高度は一三四六米。(未完)